ら、岡田以蔵が「それは危ない。動かないで下さい」と言って撃退してくれた。

（完）

参考文献

『ジョン万次郎』
永岡淳哉　新人物往来社
『ジョン万次郎に学ぶ　日本人の強さ』中濱武彦
KKベストセラーズ
『ジョン万次郎』
童門冬二　学陽書房
『ジョン万次郎』
中濱　京
冨山房インターナショナル
『ジョン万次郎』
西東　玄　明治図書出版
『漂流』
吉村　昭　新潮社

特集

勝てば官軍

瀬谷　俊二郎

今年で150年になる明治維新の光と影およびその後遺症を考えてみよう。

光の部分は新政府が、封建体制下の身分制を廃止し、西洋文明を積極的に取り入れ、憲法と議会を設け、アジアでいち早く近代化を成し遂げたという偉業である。

一方で影の部分は、天皇中心の皇国思想とそれを基とした富国強兵策で、これが植民地獲得競争と戦争への道を開き、琉球、台湾、樺太の南半分、韓国までの版図拡大、満洲建国から太平洋戦争での敗戦に至る原因となった。

1867年15代将軍徳川慶喜が大政奉還し、1868年王政復古の大号令で天皇中心の新政府が樹立され、翌年江戸が東京に改められ明治が始まったのだが、この直接の契機となったのが鳥羽伏見の戦いである。

小御所会議で王政復古が宣言され、徳川に対する辞官納地が決定すると慶喜は不測の事態が起こるのを回避するため大阪城へ退いた。このあと松平春嶽らは慶喜を新政府に参画させ、運用経費は各藩で応分の負担をするという方向で案をまとめ、岩倉具視も会津、桑名両藩の帰国と慶喜が軽装で上洛することを条件にこの案に同意した。

しかしこの案に反対であった薩摩の西郷・大久保「徳川排除（討幕派）」はクーデターを企て幕府を挑発した。

西郷は武力討幕に備えて益満休之助や伊牟田尚平を江戸に遣わし、浪人や盗賊を使って放火・略奪行為を働かせ攪乱工作を進めたため幕府は庄内藩に命じて薩摩藩邸を攻撃するという事件が起こった。

この報が大目付からもたらされると、旗本の諸隊、会・桑二藩の悲憤やるかたなく討薩・挙兵を慶喜に迫り「討薩の表」を掲げ、15,000の兵が京に向かって進発した。

勿論これは慶喜の軽装上洛とは大違いで薩長の思うつぼであった。周到な戦略・戦術や統一的な指揮・作戦もないまま、ひたすら鳥羽街道、伏見街道を密集縦隊のまま行軍した旧幕軍は待ち構える薩摩軍の格好の標的となったのである。

兵力比較では、5,000の薩長軍に対し15,000の旧幕軍。装備の点でも会津・新撰組は旧式であったが旧幕府歩兵はフランス式調練を受け火器の装備という点でも薩長軍と同等以上だったという。

旧幕府軍惨敗の最大の理由は薩長軍が「錦の御旗」を掲げて官軍となり、賊軍になることを恐れた淀藩・津藩の裏切りや慶喜自身の戦場離脱、海路による江戸への逃走などで旧幕府軍が戦意を無くしてしまったことである。

鳥羽伏見の戦いは、いうなれば薩長藩と旧幕府側の私闘であり官軍、賊軍として日本人同士が血を流して争うような義のある戦とは思えない。

このような場に錦旗を持ち出し、天皇を味方につけて成し遂げた明治維新の体質はその後そのまま日本の国体となって残ったのである。

イギリス・フランスの場合は絶対王政時代に・官僚制・常備軍・重商主義政策によって封建体制を打破しそののち近代的な国民国家が成立したという歴史がある。

日本の場合は、徳川家茂（18

６６・２１才没)、孝明天皇（１８６７・３６才没）と有力佐幕派が維新直前になくなり、１５才の明治天皇をとりこんだ公家の岩倉具視一派や薩長の討幕派が新政府樹立を宣言し明治政府が始まったのである。

因みに岩倉具視は天皇の勘気を蒙り、岩倉村に蟄居している折に〝錦旗〟の利用を考え出し、さらに孝明天皇毒殺の嫌疑をかけられている人物である。

・・・歴史家の石井孝氏は法医学者の見解も求め、孝明天皇が痘瘡からの回復途上、突如病状が悪化したのはヒ素による急性ヒ素中毒であり、使われた毒薬にはヒ素系の殺鼠剤「石見銀山」を挙げている。毒殺説は没後直ちに広がり、明治初年には半ば公然の秘密として語られていたらしいが、その後太平洋戦争敗戦時まで孝明天皇の死は〝痘瘡による病死〟が国定説とされ毒殺説はタブーとなっていた。・・・

明治政府は、政府ではなく勅令で軍事組織・総督府をつくり、総督府が官軍の名のもとに戊辰戦争を行って日本を統一した。

この総督府には、軍令、軍政に関する一切の権限並びに民生一般にわたる広範囲な裁量権まで与えられており、後の植民地経営にも適用され台湾総督府、朝鮮総督府として受け継がれることになった。

後の大日本帝国憲法は、この軍・政分離の仕組みを明文化し、軍隊の統帥・編成・宣戦布告・和平を結ぶ権限を天皇が独占し、議会は予算面における関与だけで軍をコントロールすることが出来ないことになったのである。

完

特集

能役者・梅若実の明治維新

近藤政次

はじめに

徳川幕藩体制の崩壊で、深刻な打撃を受けたのが能楽・能役者であった。彼らの多くは幕府、諸藩の抱え役者として俸禄を得ており、家禄没収で生計の途を絶たれた。

先の見えない維新後の混乱の中に在って、初世・梅若実は能舞台の移設・整備に多額の投資を行ない、新時代のメディアである新聞によるＰＲを実施。さらに殖産興業の担い手たる実業家たちへの能楽普及に努めた。本稿は明治期の能楽再興に尽力した梅若実を追う。

1．初世・梅若実のプロフィール

観世流シテ方。江戸末期の文政１１（１８２８）年４月１３日、江戸の札差の次男として生れる。８歳の時に観世流シテ方の梅若六郎家に持参金５００両をもって養子に入る。１１歳で家督を継いだ。

観世宗家に稽古に通い、１６歳の時に江戸城の謡初式に初めて出勤し、以後ますます修業に励み、嘉永６年の１１月に〝六郎〟を襲名した。江戸幕府崩壊後も東京にとどまり、能楽の灯を守り続けた。明治５年９月に〝実〟と改名し、隠居したが表舞台に立ち続けた。

隠棲した宝生九郎を能楽の世界に引き戻し、熊本・細川家の抱え能役者桜間伴馬（後の左陣、金春流）の上京を応援して明治期の能楽の復興・隆盛に多大な貢献をした。実、九郎、伴馬の３人は明治期シテ方の三名人と評されている。梅若実の残した日記は『梅若実日記』（全７巻）として公刊され、江戸末期～明治末期までの能楽の歩み、激動期の幕臣の対応など、貴重な史料として評価を得ている。実は明治４２年（１９０９）年１月１９日に死去した。

2．幕臣・梅若実の生活

（1）経済的基礎（収入源）

梅若六郎家は家康に召し出され、丹波国船井郡世木庄上稗生村（現京都府南丹市）に知行地１００石を与えられ、ほかに配当米２５石、１０人扶持の禄を受け、明治維新まで徳川家に仕えた。

元治元（１８６４）年の場合、知行地からの年貢は玄米換算で３６石８升余であり、金額換算で６３両３分２朱が梅若に届いた（同年１０月７日の日記）。

配当米２５石、１０人扶持を先の日付の日記で金額換算すると７６両となる（１人扶持＝１日当り玄米５合、年間３６０日、１０人扶持１８石）。梅若家の幕末期の総収入は金額で１４０両余となる。ただし、江戸と地方の米価には違いがあり、知行地の領地運営費、